

「英語教育改善プラン」に基づいた教員の英語力・指導力向上に向けた取組 「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～秋田県～

県の課題

P

- ・小学校:教材や教具を効果的に活用し十分な準備をして授業をしているが、自身の英語力や英語の指導力に不安を感じている教員が多い。
- ・中学校:生徒の言語活動量は多いが、言語材料の習得がねらいとなっており、ステレオタイプのコミュニケーション活動にとどまっている。
- ・高等学校:ディベートやディスカッションの場を設定しているが、原稿を基にした発信にとどまっている。生徒の言語活動量も不足している。

AKITA英語コミュニケーション能力強化事業 拠点校・協力校英語授業改善事業

県内大学等との効果的な連携を通して、外国語活動・英語担当教員の指導力及び英語力の向上を図るとともに、モデルとなる実践事例を県内の他校に提供することにより、当該校の成果の普及を図る。

D

拠点校（研修協力校）における実践研究及び教員研修の推進

- 県内を3地区に分け、地区毎に小・中・高各3校を拠点校（研修協力校）として指定
- 協力校（近隣校等）と連携しながら四つの研究テーマについての研究を推進

四つの研究テーマ

①児童生徒の英語による言語活動時間の増加

②指導と評価の改善

教員の英語発話量増加（小）とCAN-DOリスト形式の学習到達目標の達成に向けた指導と評価の改善（中・高）

※中学校の協力校

即興で話すこと及びパフォーマンステストを中心とした内容の取組

※高等学校の協力校

ディベート、ディスカッション、即興で話すことのいずれかへの取組
ALTの活用

③外国語活動・英語担当教員の英語力及び指導力の向上に向けた具体的な取組

④校種間の連携の在り方

拠点校（研修協力校）の実践例

- ・小学校では、国際教養大学が作成した「英語発話集」を活用したり、学校独自のCDを作成したりして、外国語の授業における教員の英語発話の増加と質の向上を図るとともに教員自身の英語力の向上に努めた。ほぼ英語だけを用いて授業を進めることができた。
- ・中学校ではマッピングや付箋を用い、キーワードを基に即興で話す能力の育成に取り組んだ。また、生徒の発話促進のために、ICTを積極的に活用した。
- ・高等学校では全ての拠点校が授業におけるディベートの活用に取り組んだ。生徒たちが自分の考えや意見を伝え合う言語活動の実現のためにALTとのチームティーチングを積極的に活用した。
- ・小・中・高の拠点校における公開研究会に他校種の教員も参加して校種間連携を進めた。



ディベートに取り組む高校生

英語教育改善プラン(秋田県)

C

指標内容		H27	H28	H29
求められる英語力を有する生徒の割合(%)	中	48.6	37.1	49.1
	高	35.8	37.9	41.7
CAN-DOリストの設定状況(%)	中高	100	100	100
生徒の英語による言語活動時間(%)	中	88.9	94.1	93
	高	47.9	49.5	45.5
教員の英語使用状況(%)	中	89.9	95.5	93.8
	高	46.8	47.3	45.3
求められる英語力を有する教師の割合(%)	中	26.1	28.8	27.5
	高	53.6	54.7	57.8

成果と課題

- 求められる英語力を有する生徒の割合は、中・高ともに年々増加し、県の最終目標に近づいている。
- 児童生徒の言語活動量や、教員の英語使用状況は中学校では概ね良好である。（高等学校では、科目によってばらつきがある）
- 英語担当教員の外部試験等の取得率が伸び悩んでいる。

今後の取組

特定の言語材料の習得に終始するのではなく、自分の考えや気持ちを伝え合う言語活動の一層の充実を図るとともに、教員自身の英語力の向上に継続して取り組んでいく。

A

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～秋田県三種町立琴丘小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- 1 教員の英語力及び指導力の向上
→ 全員による研修会で授業のイメージを共有するとともに、授業研究会を通して指導方法の工夫について学ぶ。
- 2 児童の発話量及びコミュニケーションの場の増加
→ 意欲を引き出す単元構成の工夫と授業の焦点化・視覚化・共有化について取り組む。

具体の取組の内容

<1について>

- ・ 授業の流れ・掲示用カードや振り返りカード・クラスルームイングリッシュの確認
- ・ 年2回の外国語活動授業研究会及び中学校の英語授業研究会への参加
- ・ 外国語活動推進教員と学級担任とのTT授業の実施



<2について>

- ・ 他の教科等の学習と関連付けながら、児童の意欲を高め、必要感があり自然な発話を促す言語活動を位置付けた単元づくり
- ・ ゴールが分かるめあて ・ 見通しをもたせるための学習過程 ・ 本時につながる既習事項等の掲示と活用
- ・ HRT等によるデモンストレーションやペア・グループでの交流を位置付けた授業の積み重ね

成果①

アンケート調査<職員～12月>
授業の流れが分かり、教師や児童の英語発話量が増加した。

アンケート調査<児童～6・12月>

	5年	6年
外国語がすき	100%↑	81%↑
話せるようになりたい	100%↑	88%↑
積極的に聞いて話している	91%↑	91%↑

成果②

- ・ 教師間でオールイングリッシュを目指した授業の流れを共有することができた。
- ・ 支援員やALTと授業の流れや役割を確認し、デモンストレーションや個の指導を充実させたことにより、児童の発話量が増加した。
- ・ 外国語活動に積極的に参加するようになり、英語をたくさん話そうとしたり、英語でコミュニケーションを図ろうとする児童が増えた。

今後の課題・方向性

- ・ 推進教員とのTT授業や研修会等を通して、教師の発話量の更なる増加を目指すとともに、授業のコーディネート力を高める。
- ・ 児童が既習事項を生かして、自分の思いや考えを伝え合うことができるように、英語での問いかけを理解し英語で答える力を高める。また、誰とでもコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～秋田県にかほ市立金浦小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・外国語活動への興味・関心を生かした言語活動の構築が不十分。→思考の流れに沿った言語活動の実施
- ・英語を用いたコミュニケーション能力・態度の個人差が大きい。→指導と評価の一体化及びTTの効果的な活用

具体の取組の内容

○共通実践事項

- ・「Classroom English」の全教職員の共通理解と実施
- ・外国語活動教室の設定・運営
- ・小集団でのコミュニケーションの場の設定(1対1を含む)
- ・コミュニケーションの視点を取り入れた振り返りの場の設定
- ・ICT教材の積極的な活用
- ・小中連携を生かした授業改善

○指定校訪問Ⅰの実践

- 4年「クロイ先生、わたしの好きなものはね」
- ・「All English」による指示・発問
- ・場の設定とグループ編成の工夫→主体的な学び

成果の共有 ← 課題の改善

○指定校訪問Ⅱの実践

- 3年「わたしのイニシャル教えます」
- ・意味や必要感のあるコミュニケーションの場の設定
- ・HRT・ALT・外国語活動指導員との連携と役割の明確化

○公開研究会での実践

6年「Who is your hero? あこがれの人紹介します」

- ・既習事項を活用した双方向の会話の実施
→表現の場と時間の保障
→グループ編成の工夫
- ・必要感や興味・関心を高める言語活動の実施
→教科横断的な単元構成
(総合的な学習の時間との関連)
- ・効率的なTTの実施⇔役割の明確化・細分化
→ネイティブの英語に触れる機会の増加



成果①

○外国語活動を肯定的に捉える児童の割合

- 《大好き・好きと回答した児童の割合》
5年生96% 6年生100%
(H30県学習状況調査質問紙調査より)
- 《選択した気持ち》
 - ・将来、社会に出たときに役立つ
 - ・内容に興味がある
 - ・わかりやすい

○指導者から見た児童の変容

- ・英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の増加
- ・英語の音声に自ら慣れ親しもうとする児童の増加

成果②

○言語活動時間の充実

- ・児童の英語発話量の増加
- ・複数回のやり取りや既習の英語表現の活用等、量的・質的な高まり
- ・コミュニケーション能力の育成
→言語・非言語を問わず、相手に伝えようとする意識の高まり

○指導体制の改善と効率化

- ・具体的な場面の例示や適切な支援ができるよう、HRT・ALT・外国語活動支援員の役割の明確化
- ・中学校教諭の助言を生かした授業改善と中1ギャップの解消
→にかほ型小中一貫教育モデル校の長所を生かした英語指導力の向上

今後の課題・方向性

○児童の英語力向上につながる評価の在り方

- ・TTを生かした評価(特に形成的評価において)の実施により、より多くの児童に改善の視点を意識できるようにすることが求められる。
- ・既習事項やコミュニケーションの実状を正しく捉えることで、指導改善を図る。具体的かつ系統的な評価規準を定めていく必要がある。
→小中のつながりを意識した指導計画・方法の確立

○言語活動の質の向上

- ・オーセンティック、創造的なやり取りができるように、言語活動の質を高めていきたい。
→聞き手の反応に合わせて、柔軟に表現を選択する場を設けていく。
- ・教師の意図や指示が伝わるような発問の在り方を、継続して模索していく必要がある。
→改善のキーワード・・・「短く」「簡潔に」「繰り返す」

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～秋田県湯沢市立湯沢西小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- 必然性のある言語活動を核とした授業づくり～児童の主体的な言語活動の充実と教師の授業力の向上～
児童も教師も英語によるコミュニケーションに対する意欲と自信につながる、西小授業スタイルの構築を目指す。

具体の取組の内容

(1)対話を通しての気付きを意識化させる工夫

- 紹介し合ったり話し合ったりする活動場面の設定と教師による価値付け … よさやつまずきを全体で共有するための「中間評価」
- 自分の変容に気付くことができるような自己評価の工夫とその活用 … 「振り返り」の視点の明確化(Today's Goalとの関わり, よさの価値付け)

(2)子どもが聞きたい、話したいと思えるような活動の展開

- 新教材に対応した年間指導計画の見直しと授業形態や指導の工夫 … ねらいを明確にした配当時間の調整
- 知的好奇心を引き出すための題材や活動場面の工夫 … 必然性のある活動場面の設定, 子どもが考えて表現する場の工夫(One-up phrase)
- ゴールの児童の姿を見通した単元計画の工夫 … 単元のゴールで使わせたい表現の明確化, そのために必要となる場面設定の工夫

(3)外国語活動に適した環境の整備

- 子どもにも教師にも魅力ある教材づくり, 環境づくりの継続…ペア, グループ活動がしやすい外国語活動ルームの整備, 朝活動や放送の活用
- 新教材に対応した教材・教具や電子機器の活用方法の見直し … ピクチャーカードやアクティビティセットの蓄積による, 効果的な教材準備

(4)ALTや教育専門監等, 職員間の効果的な連携

- クラスルームイングリッシュの活用 … Classroom Englishカードの活用による, 学級担任の英語使用量の増加
- ALTや教育専門監との連携によるHRTのスキルアップ … 教育専門監による付箋を活用したアドバイスの共有化, 打合せの充実
- 校内外国語活動主任による研修成果の伝達とミニ模擬授業研修 … 互いの授業を見合う機会の設定による情報共有, 協力校との情報交流

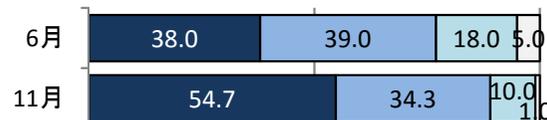
成果①

- 教師の授業力と自信・意欲の向上
 - ・場に応じた表現を, 児童が既習の中から選択して伝え合う機会のある言語活動の設定
 - ・Classroom Englishの習得と活用による, HRTによるAll Englishの授業実践
 - ・「湯沢西小授業スタイル～外国語活動～」による, 視点を明確にした授業展開の構築
 - ・対話を生かした授業づくりで, 表現の多様化と質の向上を図った効果的な中間評価
 - ・ALT・教育専門監との連携による, 授業の質の向上と教師の不安感の解消

【職員アンケートより】

成果②

- 児童の言語活動量の増加と既習表現を活用しようとする意識の向上
「これまでに学んだ英語表現を積極的に使って交流している」(11.8%↑)



- ・英語で伝える楽しさを感じていると同時に, もっといろいろな表現にふれて話そうことができるようになりたいという気持ちが高まっている。

【児童アンケート(3～6年)】

今後の課題・方向性

- ①表現の自由度を上げ, より自然なコミュニケーションにつながる言語活動の工夫
- ②「湯沢西小授業スタイル」の見直し・活用の継続(中間評価のねらいを明確にした授業づくり)
- ③英語を用いた授業に, 一人一人が自信をもって臨むための, 全職員研修の継続
- ④「書くこと」に関する研修と, 移行期の年間指導計画・活動案の見直し
- ⑤ALTや教育専門監との, 連携の仕方の工夫

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～秋田県三種町立琴丘中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・主体的に取り組める生徒が少ないため、コミュニケーションの目的・場面・状況等を理解しながら、自分が伝えたいことを表現する力を育てる。
- ・話すこと(やり取り)に苦手意識をもっている生徒が多いため、帯活動でインタビュー活動やチャットに取り組む。

具体の取組の内容

取組1 即興性を養う活動の実施

- ・帯学習においてチャットを行い、その内容を他者に伝える活動を毎時間実施する。
- ・パフォーマンステストやディベートを授業に取り入れ、「相手意識」と「必然性」のある言語活動によるコミュニケーション能力の育成を図る。

取組2 生徒の表現力を高める学習過程

- ・四つの学習過程(①コミュニケーションの目的・場面・状況等を理解する。②コミュニケーションの見通しを立てる。③対話的な学びを重視した言語活動を行う。④言語面・内容面で振り返り、学んだことの意味付けを行う。)を軸に授業実践を行う。

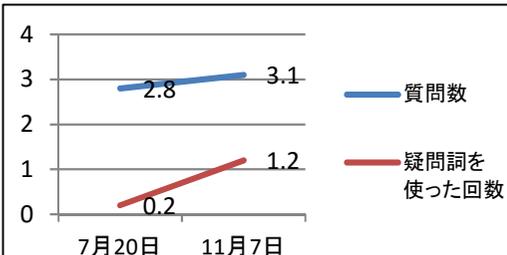
取組3 年2回の公開授業研究会を実施し、授業改善に取り組む

- ・第1回授業研究会(7月6日)Unit3 Career Day (NEW HORIZON3 English Course 2)
ねらい:不定詞の名詞的用法を使って、自分がしたいことを話すことができる。
- ・第2回授業研究会(11月2日)Unit7 ブラジルから来たサッカーコーチ (NEW HORIZON3 English Course 1)
ねらい:会話の流れに応じて、自分が知りたいことや疑問に思ったことをたずねることができる。



成果①

パフォーマンステストの定期的な実施により、指導と評価の一体化を図ることができた。



与えられたトピックで1分間ALTと会話するパフォーマンステスト

会話の流れに応じて受け答えしたり、疑問詞を用いて質問したりする生徒が増加した。

成果②

英語を用いて表現することの習慣化

- ・自分の言葉で積極的に自然なコミュニケーションを図れるようになり、新しく赴任したALTに自分や自分たちの郷土の事などを話すことができた。
- ・チャット・インタビューテスト・パフォーマンステスト・ディベートなどで実際に英語を使ってやり取りをすることで、相手に伝わりやすい方法を工夫するなど、意欲的な態度が見られるようになった。

既習事項の活用

単元で新しく習う文法だけでなく、コミュニケーションの文脈を考えながら既習の文法事項を活用してやり取りをすることができた。

対話の双方向性を重視

やり取りする目的を明確にしており、必然性をもってやり取りすることができ、それが即興性につながった。

今後の課題・方向性

めあてと振り返りの整合性

授業のゴールを意識して授業内容を精選し、生徒が自分の考えを発信できるように授業改善する必要がある。また、めあてに合わせて、どのような振り返りが適切なのか、言語面・内容面を意識して振り返らせたい。

目指す生徒の姿

到達目標をより具体的に授業内容と結び付けたり、単元ごとの到達目標を見直したりして、目指す生徒の姿に迫っていくことが必要である。

「流暢さ」と「正確さ」とのバランス

やり取りを意識しすぎて、正確性に欠ける場面が見られた。基礎・基本の確実な習得を目指して、授業改善に取り組むたい。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～秋田県にかほ市立金浦中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・英会話への苦手意識をもつ生徒が5割弱いるため、言語活動の充実を通して改善を図る。
- ・英単語や英文をもっと正確に書いたり聞き取ったりしたいと思う生徒が4割弱いるため、コミュニケーションを支える基礎的・基本的事項の定着を図るための取組や、達成度を把握するためのテスト等を積み重ねて改善を図る。

具体の取組の内容

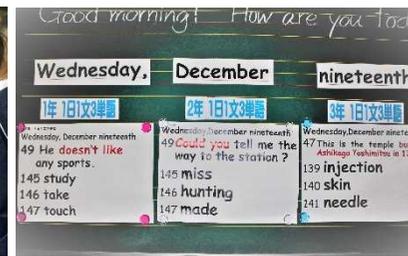
- 英語科共通の取組, 毎時間の授業での取組
 - ・1分間でのペアによるスモール・トーク, ペアのローテーション, ALTとのスモール・トーク
 - ・単元テスト, 定期テストを含むリスニングテスト
 - ・各学級の短学活で行う1日1文3単語テスト
- 生徒の英語力向上に向けての取組
 - ・ペアによるやり取り, 発表, プレゼンテーション
 - ・ALTとのパフォーマンス・テスト
 - ・定期的な単語テスト
 - ・ニュージーランドの高校生との文通
 - ・秋田県のSEA (Sports Exchange Advisor) の活用
- 公開授業研究会
 - ・ICT機器を活用しながら, 自分の尊敬する人について伝え合う活動(紹介及びやり取り)



(秋田県SEAとの授業より)



(公開授業研究会より)



(1日1文3単語テスト)

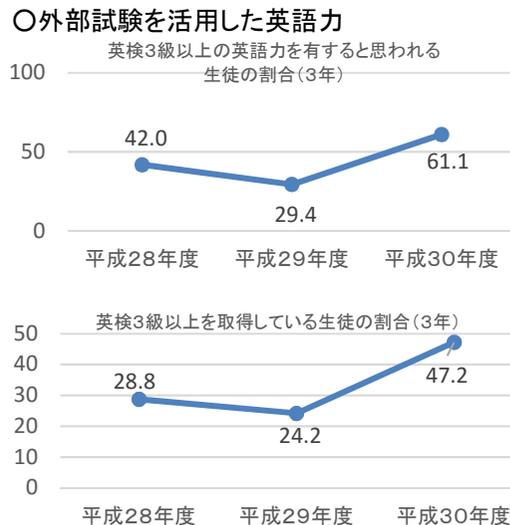
成果①

- 生徒へのアンケート結果(全学年対象)
 - ・言語活動の充実により, 英会話への苦手意識が45.3%から34.3%に減少した。特に1年生においては, 41.1%から23.5%に減少した。
 - ・自分や好きなことについての質問に, 「話せるようになった。」と感じている生徒が多くなった。



(公開授業研究会より)

成果②



今後の課題・方向性

- 小中連携
 - ・中学校英語科教員による小学校への乗り入れ授業を継続して相互理解を深め, 移行を含めた小中の系統性を把握して指導していく。
- 即興性
 - ・即興で応答できるようになってきているが, 深まりが足りない。生徒にとって必要感のある場面や題材を設定し, その場の状況や相手に応じてやり取りを続けていくための指導の工夫をする。
- CAN-DOリストと年間指導計画
 - ・話すことの技能の達成度を把握するために, 年間指導計画にパフォーマンステストを位置付けて, 計画的に指導をする。

現状の課題と課題解決のための手立て

英語による積極的な発話を増やしたい

課題: 約7割の生徒が「メモを見て話すことや原稿なしで話すこと」について苦手と感じていること

- ・相手の意図や状況を確認しながら話し続けていくための質問する力の向上
- ・説得力のある伝え方を意識させた表現活動
- ・相手意識をもったやり取りが必要になる場の設定

具体の取組の内容

① 話すための基礎的・基本的な力を付けるために

ア 基本文型の定着をねらうwarm-up活動の工夫 イ 既習の語を使ってよい表現をしている生徒の紹介

② 即興で話せるようになるために

ア つながりのある対話を目指すための帯活動として、あるトピックについてのsmall talkの実施
イ 多様な表現にふれさせるための話合いや思考を深めるための活動の工夫

③ 説得力のある伝え方ができるようになるために

ア 根拠を意識させるための付箋紙を利用した表現活動
イ 生徒の質問力を高めるために、場面や状況についての教師からの最小限の説明

④ 話す力を付けるためのパフォーマンステストにするために

ア 評価規準の見直しとCAN-DOリストの検討 イ フィードバックの仕方の工夫

これらを意識しながら
授業改善に取り組み、
9月に研究授業
11月に公開授業 を行った

成果①

○生徒の発話への意欲の向上と伝え方への意識の高まり

- ・理由を伝えたり、さらに詳しく話そうとする意欲が高まった。また聞く側も話題をイメージしやすく理解しやすい。
- ・即興で話す場面でも理由や情報を付け加えて話そうとする意識が高まった。

★「理由を付けて自分の考えを伝えることができる」

	2年	3年
6月	4.0	3.4
12月	4.3	4.0

5(とても良くできている) 4(できている) 3(まあまあ) 2(あまりできていない) 1(できていない)の平均値

成果②

○即興的な場面づくりに対する教師の意識の高まりと授業力の向上

- ・全体の場の前に一度グループで話すことで、内容の整理をすることができ、発言への抵抗を減らすことができた。
- ・板書をマッピングで整理することで、仲間の意見を参考にして自分の考えを広げさせていくことができた。
- ・板書から話題を深めていくために、教師からの次のトピックの提示をすることで即興的な場面を作ることができた。

今後の課題・方向性

① ペアやグループの活動のレベルアップ

- 質問する力を向上させることで、生徒だけで会話を深めていく力を付けさせたい。
例: グループでの話合いを生徒がコーディネートする。

② 「メモを見て話すことや原稿なしで話すこと」への前向きな気持ちの醸成

- 「自信をもつ+話すことは楽しい」を実感させていきたい。
→ 即興で話す経験を増やしていくこと
→ 興味や経験を基に話す場の設定

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・情報や考えなどを伝えることが苦手な生徒が多い→英語科として学年ごとに段階的な取組をする
- ・自己表現(話すこと・書くこと)における正確性に課題がある→ALTと協力し、生徒のスピーキングやライティングに適切なフィードバックをする

具体の取組の内容

①校内の英語科共通の取組

1年生→「自分の意見を英語で述べるができる」

2年生→「相手の意見に対して質問をする」

3年生→「相手の質問に対して反駁する」

※教科書本文の内容理解に留まることなく、personalizationを重視する。

②公開授業の実施

目的①ディベートの要素を取り入れた言語活動による授業改善

②CAN-DOリスト形式の学習到達目標の活用と評価の工夫

③生徒の英語による言語活動時間の増加

第1回 7月17日 参加者12名

第2回 11月16日 参加者13名



<第2回公開授業の様子>

成果①

【定量的評価】

調査対象:2年A組

(公開授業実施クラス)

Q1:ディベートは、英語力向上に役立っていると思いますか。

「はい」、どちらかと言えば「はい」→92%

Q2:Q1で「はい」「どちらかと言えばはい」と答えた人は、具体的にどう役立っていると思いますか。(1つ選択)

ア 英語学習に対する意欲向上	17%
イ 「話すこと」への抵抗感軽減	29%
ウ 即興的な自己表現	46%
エ その他	8%

成果②

【定性的評価】

①言語活動の高度化に向けた具体的な取組や授業改善が促進

・昨年度までと比較し、科会を開く回数が増加し、科内での情報交換の場が増えた

②パフォーマンス評価の継続的な実施等、学習評価方法の工夫・改善

・第2回公開授業協議会でパフォーマンスの評価方法として、タブレットの活用例を挙げ、指導助言の教授から評価された

今後の課題・方向性

①自己表現における正確性

- ・即興的に自己表現できるようになったと感じる生徒もいる一方、ディベートをする上で不足していると感じるもののトップは「語彙力」であった
- ・ALTと協力し、生徒のライティングに適切なフィードバックをする

②内容を深めるための背景知識量の増加

- ・インプット活動を工夫する
- ・トピックによって他教科と連携する

③英語科教員同士の指導や評価の共通理解

- ・学年ごとに段階的な指導を継続する
- ・CAN-DOリストの活用に向けて見直しをする

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～秋田県立本荘高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・スピーキングやライティング活動が授業で十分に行われていない → 教員の意識改革を行うとともに、授業にディベートを取り入れて表現力・思考力の向上を図る
- ・自発的・即興的発話を促す機会が少ない → 帯活動として生徒同士が会話をする場面を作る
- ・身近なことは表現できても、自分の意見や考えを述べるのが苦手な生徒が多い → 帯活動のレベルを少しずつ上げ、意見や理由を述べる活動に結びつける

具体の取組の内容

①公開研究授業の実施

研究主題

「英語授業におけるディベートの活用と評価の工夫 -表現力と思考力の向上を目指して-」

第1回(8月31日、参加者18名) ディベートにおける反論の仕方

第2回(11月13日、参加者30名) ディベートの立論→反論

②毎時間の取組

[1年コミュニケーション英語Ⅰ] ※fluencyと思考力の深まりを重視

・スピーキング活動

自分のことを話す → 意見と理由を述べる → 賛成・反対と理由を述べる

・ライティング活動

本文に関する英問英答 → 意見を書く(レッスンごと) → 意見を書く(レッスンのパートごと)

[1年英語表現Ⅰ] ※accuracyも意識

・パートごとに3文程度のライティング活動を継続 → ALTの添削後、クラス全体にフィードバック

Lesson 7 Japan's Changing Population

Class ___ No. ___ Name _____



Getting married is better than being single.

Step 1: Write your argument.

I believe getting married (is / is not) better than being single because _____

Step 2: Write the rebuttal.

相手の主張を書く。

You said that _____

However, it is [下の①～⑤のどれかを入れる] _____

because _____

Therefore, getting married (is / is not) better than being single.

Useful Expressions for Rebuttal

- ① not true 「正しくありません」
- ② not always true 「いつも正しいとは限りません」
- ③ not significant / important 「重要ではありません」
- ④ not relevant 「関係ありません」
- ⑤ the opposite 「逆です」



Step 4: Listen to the rebuttal and take notes.

第2回公開研究授業で使用したワークシート(一部省略)

成果①

[生徒の変容]

- ①英語学習や英語使用に対する興味・感心の高まり
 - ・平成30年度秋田県高等学校学習状況調査(1年)

	本校	県全体	本校H29
英語が大変好き	17.0%	14.1%	12.7%
好き	34.5%	30.1%	33.5%

- ・授業中の言語活動時間の増加
- ・即興で話そうとする積極性の向上

②表現力の向上

進研模試 1年7月 → 11月
分野別「リスニング」「表現力」正答率

	7月	11月
リスニング	47.2%	53.9%
表現力	16.4%	20.0%

成果②

[教員の変容]

- ①授業改善の意識の高まり
 - ・思考力・表現力を向上させるための活動の増加
- 平成30年度秋田県高等学校学習状況調査(1年生)
(上: と思う 下: どちらかと言えば思う)

	本校	県全体	本高H29
授業で自分の考えを発表する機会が与えられている	71.2%	61.1%	73.7%
	25.3%	30.8%	22.0%
授業で意見交換や考えを発表する活動をよく行っている	75.1%	54.6%	69.5%
	21.4%	32.4%	26.3%

- ・英語使用率を向上させようとする意識の向上
- 英語教育実施状況調査(教員)
コミュ英ⅠⅡⅢ「発話を50%以上英語で行っている」
H29 7人中3人 → H30 7人中4人(微増)

②小・中学校との情報交換

小・中学校公開授業に参加
本校の公開授業にも中学校から参加

今後の課題・方向性

- 自己表現における正確性の向上
 - ・即興で話すfluency重視の活動とaccuracy重視の活動をバランス良く組み合わせる
 - ・正しい英語にできるだけ多く触れさせる(教員の英語、ALTの英語、読んだり聞いたりする教材)
- 3年間を見通した指導計画と評価方法の工夫
 - ・3年間でディベートの完成形ができるように、学年進行で指導計画をたてる
 - ・CAN-DOリストをより検証可能なものへと改善する
 - ・授業内の活動の評価方法として、ICレコーダーやタブレットの使用の可能性を検討する
- 教員の授業力向上
 - ・英語使用率を向上させる
 - ・日常的に互見授業や授業アイデアの共有を行う
 - ・ALTとのTTをより充実させる
- 言語活動の高度化
 - ・ディベート等で社会的な話題を扱うことを継続する

現状の課題と課題解決のための手立て

- 課題①ディベート要素を取り入れた授業の工夫(手立て:互見授業の励行、科会における情報とアイデアの共有)
②CAN-DOリスト形式の学習到達目標の活用とパフォーマンス評価の工夫(手立て:CAN-DOと照らし合わせながら評価する)

具体の取組の内容

研究主題:「ディベートの要素を取り入れた統合的な活動をととして、相手の論点に対して即興で対応する力を養う」

具体の取組

- ①年2回の研究授業の実施。
- ②各Lesson終了後に既習関連トピックを用いて(簡易)ディベート活動を行う。
- ③自分の考えを、賛成・反対のどちらかの立場を明確にして意見を書く(50語以上で)。
- ④英語科職員全員で教育目標のイメージ化。
- ⑤CAN-DOリスト形式の学習到達目標の改訂
- ⑥ALTと授業で目指すゴールの共有化

成果①

定量的成果

- ・ワードカウンター1分間
4月は50-60語→9月80-90語に増加
- ・自分の意見を書く(英作文10分)
4月は20-30語→9月50-60語に増加
- ・自主的に意見を英語で書いて添削を申し出る生徒の増加 200-250語

成果②

定性的成果

- ・人前でも臆することなく英語を話す生徒の増加
- ・主張、理由、例、主張と論理的に話すことができるようになった
- ・意見の違いを踏まえ他者と協力しながら解決策を考えられるようになった

今後の課題・方向性

- 1 ディベート活動を授業に取り入れた「角高メソッドの確立」
- 2 CAN-DOリスト形式の学習到達目標の活用と進捗表のリンク
- 3 パフォーマンステストの評価基準の設定
- 4 思考の源になる背景知識の醸成
- 5 日本語の語彙と英語の語彙のギャップ
- 6 社会的な話題や時事問題についての知識不足
- 7 教科横断的な学習そして主体的・対話的で深い学びのための課題設定